ふかまちのまど

第三六号　二年七月一日
発行元　深町連合町内会
連絡先　☎六三二三九二二

上組町内会だより

桜並木と市道の草刈り

上組町内会長　天木　雅之

六月十三日」（日）公民館横の桜並木と市道の草刈りを実施しました。

梅雨に入りむし暑さが気になる季節になり、又、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、三原市独自の警戒宣言が出され感染防止対策をする中、多数の皆様に参加頂きましてありがとうございました。

皆様の、ご協力のお蔭で桜並木と市道の草刈りを終了することができました。

桜並木

町内の、皆様には何かとご不自由をお掛けしますが、何卒ご理解とご協力をお願いします。

▲▲

歩く会にご参加を

歩く会幹事　石井　堂熙

三原市本町　大島神社

月　日　七月一三日（火）
予備日　七月十五日（木）

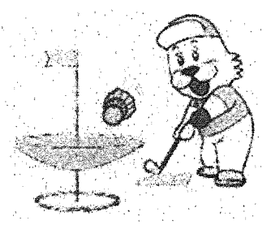
行程
九時〇〇分　深町上組公民館発（車）
九時三〇分　宗光寺付近より探訪開始
十一時三〇分　探訪終了　昼食
十三時〇〇分　深町上組公民館着（車）

※六月八日の予定は、先月に続き、コロナのため、社会福祉協議会よりの要請もあり、中止しました。

七月もコロナの状況によっては中止する場合もありますので参加希望の方は（64-8668）までご連絡下さい。

▲▲

TBG協会より



第百七回三原市TBG月例大会は、六月十二日に予定していましたが、新型コロナウイルス感染拡大防止の為に二十六日に延期しました。

TBG協会
会長　船本　雄三

▲▲

「ふかまちのまど」ホームページのアドレスは
http://www.jcat.ne.jp/~fuka/top.html

買物レシート投函のお願い

太鼓踊り保存会
会長　西本　薫

今年は早い梅雨入りでしたが、皆様には、日々健やかにお過ごしのことと存じます。

平素より太鼓踊り保存会には格別のご支援を賜り、厚くお礼申し上げます。

この度、ニチエー中之町店様のご厚意により、コミュニティボックスを設置しています。レシートの投函、宜しくお願い致します。

▲▲

うさぎが二匹

深町子どもを守る会

子どもをみんなで守りましょう。

深小の子供は

○午後四時前に下校します。
※下校時間は日によって異なることがあります。
○近くで、遠くで、みんなで見守りましょう。
○あいさつ声かけをしましょう。

深の歴史余話より

平成二年（二〇〇〇）八月　発行
深町町内会連合会
深郷土誌編集室

文・高崎　壽郎
絵・船本　輝明

人口の推移について

江戸時代、深村の戸数人口はたいした増減はなく大体平均していた。即ち、戸数は一五〇戸前後、人口は六百人未満で一戸当たりの人数は意外と少なく四人強となる。

その時代、高率の年貢（深村はおよそ七公三民）を収めるためには、労働力をいくらでも必要としたのになぜ一家族の人数が少ないのだろう。

それは、子どもを産まなかったのではなく、家族が増えると食べていけなかったので産めなかったのである。人々の間では、間引きが暗黙の了解で普段に行われていたと推測できる。

江戸時代約二百七十年間は、人口にほとんど増減なく、全国平均三千万人が続いたようである。

次は全国的に、言えることだが、明治になって人口の増加が顕著になってくる。

ご存知のように、深は明治二二年（一八八九）から昭和二六年（一九五一）までの約六二年間は、現在の尾道市久山田町と同じ村だった。その間、戸数は平均深一五〇戸、久山田一〇〇戸だったといっている。

注目は太平洋戦争の終わった昭和二〇年（一九四五）の人口である。女性が男性より約百名多い。これは、戦争で犠牲になられた方やまだ復員されていない方が多かったからと思うが、これをみても戦争の傷跡が大きかったことがわかる。

それ以来、発表される統計資料をみても、全国的にほとんどの所で女性が男性より多いのである。女性が男性と比べて長生きということもあるが。

表でもわかるように、昭和五十年代からは、一世帯四人を切ってしまった。これは核家族化が進行し、世帯数が増えた関係もあるが、子どもは二人までが普通になり、沢山産まなくなったからと考えられる。

それから二〇年、今我が国は少子化時代といわれ、出生率も一・四三人までさがった。これは世界一低いということである。

深町（村）の人口推移

時代（年）	戸数 世帯数	人口（人） 男	女	計	備考
宝永 6（1709）	185	266	270	536	不詳状況詳しく
文政 2（1819）	129	—	—	585	国語古刹周下法らべ清宗寺
文政10（1827）	130	—	—	564	
天保11（1840）	138	—	—	—	
明治 4（1871）	—	379	347	726	廃藩置県
明治11（1878）	155	—	—	—	
明治21（1888）	156	—	—	867	久山田村と合併前
大正11（1922）	268	—	—	1,460	深田村（深・久山田）
昭和20（1945）	170	442	545	987	終戦の年
昭和25（1950）	195	504	562	1,066	三原市へ合併前
昭和35（1960）	193	457	500	957	
昭和40（1965）	196	415	465	880	東京オリンピックの翌年
昭和45（1970）	198	387	411	798	
昭和50（1975）	218	403	431	834	山陽新幹線開通
昭和55（1980）	234	419	454	873	
昭和60（1985）	241	430	461	891	
平成 2（1990）	254	407	441	848	
平成 7（1995）	290	486	522	1,008	太郎谷バイパス開通
平成12（2000）	405	525	550	1,075	三原市合併（5月1日）

※ この調査には、自重氏人氏、小川トシコ氏のご協力をいただきました。

令和3年5月31日現在
世帯数　507戸
男　578人
女　589人
計　1167人
（深町・中之町南含む）

深町各種団体七月行事予定

◆小学校
▼租税教室（5・6年）　一五日
▼終業式・個人懇談会　一八日
◆如水館中学・高校
▼期末テスト　一・二日
▼オープンスクール　四日
▼学年朝会（3高）　五～九日
身だしなみチェック週間
▼学年朝会（2高）　六日
▼学年朝会（1高）　八日
▼合唱コンクール　一六日
▼終業式　一九日
▼保護者会　二〇・二一日
▼前期夏期講習
就職セミナー（小論文セミナー）　高3希望者　二六～三〇日

▲▲

ピッコロだより

こんにちは、深町社会福祉法人ささえ愛ピッコロです。

ピッコロは現在7名のご利用者さんとミニトマトの栽培管理、出荷、原木シイタケの管理、内職作業、公園整備等の活動をしています。

ミニトマトは無農薬で栽培し「神明の里」にて好評販売中です。

おかげさまで売れ残ることがなく発売開始後一ヶ月を経過しています。

完熟梅干しも「神明の里」にて好評販売中です。

このたびピッコロでは、深町町内の草刈り作業を行おうと考えております。

お庭の草取りも大歓迎です。

どうぞ、ピッコロ（0848-36-6107）までお電話ください。

▲▲

長寿も世界一。現在女性八三才男性七七才が平均寿命である。これは大変喜ばしいことであるが、我が国の少子化傾向を考える時、この様な人口のバランスでよいのか気になる所である。

平成七年（一九九五）太郎谷バイパスの開通は深の門戸を開いた。閑静で緑の多い深の自然環境を求めて新築の家が目立ち始める。

平成九年（一九九七）の現在、世帯数も人口も急増しだした。学校は複式を解消した。

これからは、深町の人口が千名を下ることはもうないだろう。

一方、一世帯の人数はついに三名を切ってしまったが。

続き

千川神社物語（一）

＝八幡宮参拝について＝

氏神千川神社はどこの町（村）にもある八幡宮のことで、深は地名から千川神社と呼称している。

お宮は元和二年（一六一六）の創建といわれ、祭神は八幡神と大山祇神である。宮司は、中之町にある式内郷社、賀羅加波神社の山持龍郎氏。

祭礼は、毎年十月十七日（もとの神嘗祭）に氏神祭が行われ、村民はこぞって参詣していた。毎年の祭事には、村内上・中・下組が輪番で、神楽又は仁和加等を奉納していた。現在は、十月の第三土曜日に祭礼を行い、協賛演芸大会を開催している。

さて、昭和十九年（一九四四）から終戦まで、都会の児童を戦火から守るため学童の集団疎開が全国的に行われた。

深へは大阪市福島区海老江東国民学校の六年生が、また三成国民学校（現尾道市立三成小学校）へも同じ学校の子がきた。

その内、三成校へきた子の一人が、昭和十九（一九四四）年九月二十日から翌年の二月二十一日までの五ヶ月間の疎開中、克明に日記を付けていた。歴史を知る上で貴重な資料である。

その中から、神社参拝を引き出してみると、

・大詔奉戴日（太平洋戦争の始まった日で各月八日）
・秋祭り（十月三十一日）
・新嘗祭り（十一月二十三日）
・八社参拝・必勝祈願（十二月九日）
・皇太子殿下御誕生日（十二月二十三日）
・四方拝・皇室の御栄と必勝祈願（一月一日）で、深の場合も同様

と考えられるが、月平均二回は宮参りをしている。

氏神鎮守の森は、村ごとにある身近な神様だった。出産、結婚、病気など村の人々は何かにつけ「神仏の加護」を祈った。

戦争中は、家族や地域でも、武運長久を祈願しての八社参り（次号参照）や、五穀豊饒祈願など、お宮へ参詣することが多かった。

参道の並木を左右に、老樹の下うっ蒼たる森の中の神社にお参りすると、なにか神々しさを覚たものである。村民も、氏神八幡宮を心の寄り所にしていたことがよくわかる。

今、宮参りをされると、境内が整美されていることに気付かれると思う。これは、妙齢の女性のご奉仕によるものである。

先日、その女性と話をする機会があったが、「私は子どもに恵まれたが、子どもは身体が弱く病気勝ちである。少しでも健康になるように神様におすがりしている。深の方は、温かく声かけし、優しく接してくださる。心から感謝している」と、言われた。

拝殿の拭き掃除から境内の草取りまで、黙々と奉仕される姿には頭がさがる。

又、盆前や秋祭りの前の如水館高校野球部による境内の清掃にも、厚く感謝している所である。

千川神社物語（二）

＝八社参りについて＝

太平洋戦争も末期のころ、必勝祈願と出征する兵士の武運長久を祈って、八社参りが盛んに行われた。

八社参りとは、この辺りにある久山田、吉和、向島西、向島東、久保、栗原、三成、木ノ庄東、木頃、深の各八幡宮の内八社へ参詣することである。

何故八社かというと、軍事の守り神である八幡大菩薩の「八」から八社になったという言い伝えがある。

平成八（一九九六）年の秋祭りの準備中、八幡宮（千川神社）拝殿の鴨居から、八社参りの折奉納した「しゃもじ」が数枚発見された。

ある古老に訊くと、「八社参りは、昭和一九（一九四四）年の春ごろから終戦の昭和二〇（一九四五）年八月頃まで、毎年何組もの参拝者が見られた。家族、親戚、知り合いなどが一団となってお詣りする。時には講中や愛国婦人会などですることもあった。一社ごとに参詣した八幡宮の柱に武運長久を祈願した「しゃもじ」を打ち着けた。弁当持ちで一日の内に八社を歩いて廻るのは大変な重労働で、足が棒になるほどだった」と話された。

そうまでして、出征兵士の武運を氏神に祈ったのである。また兵士にはお守りとして、千人針をした白い布を持たしたりした。

集団疎開の児童も必勝祈願の八社参拝したことは前号で紹介した所。

あとの調査で、本文中の「しゃもじ」の主である村田儀一氏は久山田町（尾道市）に健在であることがわかり、後日訪問した。

村田氏は大層壮健であり持参した「しゃもじ」のことを話すと、次の様に話された。

「私は昭和一八（一九四三）年に出征したので、父や姉が私の為に八社参りをしてくれたのでしょう・私は、中支から満州へ移った時終戦を迎え、ソ連（現ロシア）へ抑留されました。今のカザフスタン共和国のカラカンドという炭鉱の町で石炭を五年堀り、昭和二五（一九五〇）年二月に帰国しました。お礼参りはした覚えはありませんと。

千川神社物語（三）

＝奉納絵馬について＝

絵馬とは、祈願や報謝のために、社寺に奉納する絵の額。生きた馬の代わりに絵に描いて奉納したのが始まりといわれる。屋根形の小絵馬や大形の額絵馬などがある。（大辞泉）今は、時代を反映して受験の合格祈願の絵馬が多いようである。

千川神社の拝殿の正面でまず目に入るのが、鬼子母神の大きな額絵馬であろう。

奉納者は下組の平木サヨさんで時代は不詳。尚、平木姓は現存しない。

ご存知のように「鬼子母神」は女神の名。千人の子があったが、他人の子をとって殺して食ったため、仏はその最愛の一児を隠してこれを教化し、のち仏に帰依して出産・育児の神となった。手にザクロの実を持ち、一児を抱く天女の姿をとる。人々は多産増殖の女神として信仰する。

サヨさんは鬼子母神に何を祈念したのだろう。

拝殿の内に入ると、ちょっと注意しないと気付きにくいが、鴨居の所に「三十六歌仙絵馬」がかけてある。

平安中期以降「古今集序」に評された六歌仙にならって、六人または三十六人の秀でた歌人を選ぶ習慣ができた。

三十六歌仙は、藤原公任（九六六～一〇四一）の三十六人撰に基づく三十六人の秀でた歌人のことで、よく名の知られている人をあげると、柿本人麻呂、紀貫之、大伴家持、山部赤人、在原業平、僧正遍昭、紀友則、小野小町、源順らがある。

絵馬は縦42㎝横25㎝で、縁どりのある長方形の板に一人ひとりの肖像を描き、それぞれの詠歌一首を添えたもの。書は達筆そのもの。絵もカラーで人物の特徴をよく掴んで描かれている。全体に、実に鮮やかな出来栄えである。

少し残念なことは、三十六枚中七枚がかけていることだ。絵馬の奉納者やその時代もわからないが、相当昔に奉納されたようだ。

神社に三十六歌仙の絵馬が奉納されていることは、極めて珍しいのではないか。これは、深の人々が文化的に豊かな生活を送って来た証左といっても過言ではない。このことは、千川神社物語（四）でもう少しくわしく書いてみたい。

とまれ、奉納絵馬の数は多くはないが、これ以上欠けたり破損したりすることがないよう、維持管理に心がけることは私達の務めだと思う。

最近では昨年暮中組船本輝明氏が山陰の「夢博」の絵馬を奉納された。

千川神社物語（四）

＝歌舞伎芝居について＝

奉納絵馬の内で、特に注目に価するのは二面の歌舞伎芝居奉納額である。

千川神社物語（一）で書いたように、秋祭りには、上組・中組・下組が輪番で、神楽又は仁和加などを奉納していた。又、他村へ神楽の出張をしていたくらい熟達した者もいた。

深は歌舞伎芝居の盛んな土地であった。それは、神楽を舞うことによって培われた芸への熱意を背景として継承されたようである。神楽を達者にこなす者は歌舞伎芝居においても名優であった。

村を構成する三地区の内、中組はとりわけ歌舞伎芝居に力をそそいでいた。

明治三三（一九〇〇）年、芝居の師匠と、浄瑠璃・三味線・囃子の師匠をともに因島の重井より招いている。そして、小屋掛けの一ヶ月前、この二人の師匠のもとで、十四・五歳から三四・五歳までの男はすべて芝居や浄瑠璃などの稽古にいそしんだ。若い二人の女性も入れて。

歌舞伎芝居は、毎年秋の取り入れ後に行われた。夜な夜な集まり、稽古の効もあって、この年の中組の公演は大盛況であったという。

現在の深小学校のそばに建てられた芝居小屋は、仮設とはいえ回り舞台の本格的なもので、客席は二反余りの田をならして設けられた。見物人は深の住人ばかりでなく、近隣の尾道、向島、美ノ郷、木ノ庄、御調八幡、山中（中之町）、三原などからもやって来て活況を呈した。

明治三三年（一九〇〇）に上演された芝居は、「式三番叟」「曽我物語」対面の段、「絵本太閤記」二段目より十段目まで、「平仮名盛衰記」船頭松右衛門住家の段、「鎌倉三代記」三浦之助別れの段、「菅原伝授手習鑑」寺子屋の段、「摂州阿漕浦」平次住家の段、「傾城阿波鳴戸」十郎兵衛住家の段、「仮名手本忠臣蔵」三段目、以上の九芸題である。

好評におされ、公演は六夜連続で行われた。役者は二八名で、最年少は十四歳、大道具・小道具や床山などの裏方および世話人なども加えると、一座は総勢四十名にもなった。

公演を終えた中組の歌舞伎芝居は、その後近隣各地に招かれ、美ノ郷、木ノ庄、御調、八幡、山中（中之町）などおよそ十数か所で公演を行っている。また、尾道にあった「偕楽座」（現久保の共同福祉施設）という芝居小屋にも招かれて、数日間興行を打ったことも記録に残っている。

しかし、隆盛を極めた深の歌舞伎芝居も、大正期に入るとすっかりさびれてしまう。若いエネルギーを芝居に費やしたことのある人々も、今はほとんど逝き、かっての公演を記念して、八幡宮に奉納された二面の額だけが、当時の熱気を偲ばせるのみである。

何はともあれ、さびしい労働の明け暮れであったが、「忙中閑あり」で、村民に芸能を楽しむ心の余裕があったからであり、この気持ちは現代も脈々と受け継がれているように思う。

敬老会や秋祭りの協賛演芸大会へ積極的に出演されるようすをみても。

▲▲